

## 近畿における「家」研究の動向

〈報告要旨〉

相山女学園大学 山本正和

今日の報告の内容は、戦後における近畿の家・同族に関する研究の流れを概略的にたどってみることである。また、それらをふまえつつ、報告者自身が家を研究するなかで考えてきたことについても最後に付け加えたい。なお、案内では報告題目が「近畿の家の変容」になつてゐるが、都合により「近畿における「家」研究の動向」に変えさせていただいた。

村研で家が共通課題に取り上げられたのは、一九七四年（二二回大会）、七五年（二三回大会）のときである。それから一〇数年たつ

て、今回再び家が共通課題として取り上げられてくる背景は何なのか。これはひとつ重要な問題であるが、一方近畿における家研究をみてみると、村研の研究課題とかかわったかたちで展開してきたとはいがたい。このことがどういう意味をもつていて、この報告での主要な関心はむしろこちらの方である。

さて、一九八四年の村研大会のときに、松本会員が戦後における近畿村落の研究を整理した（松本通晴「近畿における村落研究の諸系譜」「村落社会研究」第二〇集）。この整理軸にそつて、戦後の近畿の家研究も考えていきたいが、そのため簡単に松本論文の内容についておここう。松本会員は村落の研究課題を次のように時期区分している。すなわち、第一期（一九五三～一九五七年）、第二期（一九五八～一九六九年）、第三期（一九七〇～一九七六年）、第四期（一九七七～一九八二年）の四つであり、整理軸として、地主制・人口問題・家族問題（第一期）、村落共同体論・農民層分解・農民意識・村の解体・村落変化の推進力（第二期）、生活破壊・資本の農村掌握・都市と農村（第三期）、主体的再編成・農村自治（第四期）をあげている。しかし、近畿村落の研究の流れをみてみると、以上の村研の共通課題との間には大きな落差があり、近畿村落の研究者は独自の問題領域を貫いているように思える。とくに、第三期以降の落差は大きい。一方、経済史などによつて近畿村落の先進性が指摘されていながらもかかわらず、むしろ社会学においては、近畿の周辺部における伝統的家慣行の存在が主張されてきた。したがつて、「むらの解体」という研究課題が村落で取り上げられながら、近畿村落の研究ではむらの「解体」ではなくて、むらの「存続」の側面、もしくは非常に固い社会構造の部分が強く強調されてきた。この落

差が、近畿村落の特質によるものなのか、それとも研究者の問題意識の違いによるもののかは明らかでないにせよ、ともかくそうちた違いの背景を探らなければならない。以上がおおよその松本会員の主張であった。

また、戦後の家族研究の区分については、布施晶子氏（「家族研究の軌跡と課題」『社会学評論』三八一）によると、第一期（戦後～一九六〇）……家族近代化論展開期）、第二期（一九六〇～一九七〇）……内部構造分析展開期）、第三期（一九七〇～一九八〇）……家庭問題分析展開期）、第四期（一九八〇～現在）……転換期の家族論展開期）とされている。このうち、第一期については家族の民主化ということで、近畿における家研究と重なりがみられるが、それ以外については、重なりがみられない。

以上を念頭におきつつ、先に述べた近畿村落研究についての時期区分を利用しながら、目にふれたかぎりにおいて戦後の近畿における家研究の展開を後づけたい。まず、戦後から六〇年代まで（第一期）についてみると、その特徴のひとつは、従来東北などで検出されていた家を近畿において確認しようとするところにあつた。近畿の家研究は、戦前期においても都市の家に関する中野卓会員の研究や歴史学からの研究などがあつたが、本格化するのは戦後になつてからである。とくに戦後、丹波の同族団を対象とした竹田聰洲氏の一連の研究は先駆的であった（「村落を構成する同族祭団」「史林」三六一三、など）。また、志摩におけるつまり婚や隠居制の研究もおこなわれ、姫岡氏の研究へと結実していく（姫岡勤ほか「志摩国府の隠居制」「社会学評論」九一四）。志摩における研究は、家族や夫婦の民主化という背景の中でも問題とされてきたものであつた。一

方、近畿の家研究を考える場合、農村の家研究だけでなく、都市の家研究も考えなければならないだろう。この時期に、都市の家研究で特筆されるべきものは、中野会員による「暖簾内」の研究である（「同業街における同族組織」「社会学研究」一一三、など）。この研究は戦前の有賀氏の村落研究の延長上に位置づけられるもので、地縁的な関係の重視がみられる。さらに、横山定雄氏による研究（「暖簾内習俗にみられる人間関係」立教大学“Human Relations”）や立命館大学の共同研究（「家業」「立命館大学人文科学研究所紀要」五）もおこなわれた。しかし、前者の横山氏の研究は、それ以後産業社会学の方向へ展開していった。また、後者の立命館大学の研究は民法改正の中での家に焦点が向けられていたため、地域社会をも枠組みにいれた家研究へと発展していかなかつた。

第二期は、おおむね第一期の延長線上にあつたが、重要な点は余田氏によつて株講が取り上げられたことであろう（余田博通ほか「講当・株講・親方子方」「関西学院大学社会学部紀要」八）。それまでの竹田聰洲氏の同族研究が主として宗教祭祀や先祖祭祀の面からおこなわれていたのに対し、余田氏らは村落そのものとの関係において同族を捉えようとしたのである。また、竹田氏との家理解の違いを背景としながら、親族組織の中で同族を捉えようとする吉会員の研究も出された（「同族組織と親類関係」「社会学評論」一七一）。しかし、丹波という地域において、強い家、同族のありようを捉えていこうとする立場は第一期と変わつていい。ただ、村落の階層制の中で同族を捉えようとした松本会員の観点は新しいものであつたし（「同族組織と村落構造」「林業村落の史的研究」所収、など）、親族組織の中で捉えようという先の立場もひとつの見方を形

成した。

次にこの時期の都市の家研究についてみてみると、社会学からは中野会員の研究を除けばあまり取り上げられず、むしろ、経済史や経営史の観点から有力な研究が打ち出されたことが特徴である（岡重明「三井諸別家の相続形態」同志社大学『社会科学』三一二・三、など）。これらの研究は、大阪の鴻池や京都の室町の古い商家について、そうした商家が近代にどのように適応していくかという観点から家の変質を捉えていこうとするものであった。近世商家が近代にどのように対応したかという個別資本の研究がおこなわれたのである。それによると、資本の増大とともに、明治の半ば以前にすでに、大商家では所有と経営とが分離していたことが示された。つまり、大経営になると早い時期から家と経営が分離していくのである。しかしながら、中小の商家や都市の中の零細な自営業者についてはふれられておらず、そうした商家の中ではどうのように存在しているのかについてが、次の第三期の課題となつていくのである。

次に、第三期についても、株講は一貫して取り上げられている。また、第二期には丹波の、第三期には近江の家格を、歴史的な観点から掲げようとした点も注目される。そのほか、対象地域が拡大するにつれて、多様な家の慣行が研究されるようになつた。概していえば、これ以後の近畿の家の研究は、従来研究されていた同族とは異なる家の慣行を問題としてきたといつてよい。マキや「与力」の研究などはその例である（三上勝也・山本剛郎「山村の同族と『与力』関係」「ソシオロジ」一一一・三、ほか）。さらに、実態調査によって、近畿北部に同族が濃密に分布することが明らかにされ、

これが近畿村落の特色であるといふことが言われたりもした。一方、都市の家研究については、中小の商家が焦点となつた。中野会員の商家研究を受け継ぎつつ、そうした中小の商家が戦後どのように存在し、機能してきたのかについて研究されたのである。また、職人の家なども対象とされるようになつた。こうした都市の家研究は、商家を老舗と捉えることによつて戦後の家を問うていこうというものであつた。

第四期については、「与力」研究や株講の研究の成果が現われてはきたものの、農村においても都市においても、家研究が大きな展開を見るということはなかつたと思われる。

以上が簡単な整理であるが、まず、近畿の家研究の蓄積は意外と少ないことが指摘できる。また、伝統的慣行が残っている部分に研究が集中しており、歴史研究の中ではともかく、社会学の中では先進地としての家の研究、もしくは家の「解体」の研究が非常に少ないようと思われる。これは、先の松本会員の近畿村落研究についての考察と同様である。

また、問題を指摘するならば、丹波や丹後、志摩地方など近畿地方の周辺部に残つてゐる家の強いあり方と、暖簾内として捉えられたような近畿の中心的都市部での家のあり方とが、どういうかたちでつながるのかということがあげられよう。

最後に、報告者が戦後の商家、とくに職人の家に接し、調査研究するなかで感じてきたことを述べたい。そこでの疑問は、都市の中での家を支えていくものは何かということであつた。村落の中で家を支えていく条件を考えてみると、たとえば、歴史的には地主制の問題、生産上の問題、村落構造そのものの問題などがあげられよ

う。都市についてはどうか、私たちがおこなつた調査から考えてみたい。京都には、百年以上続いた商家が千軒ばかりあるといわれているが、一九七七年にそのうち京都市内にある四七〇軒を対象として老舗調査をおこなつたことがある。その結果からうかがわれるのには、非常に強い家の残存であつた。この強い家を支えるのは、経済的条件でないとするといつたい何なのか。その後、職人の家を対象に調査をおこなつた。そこから感じたことは、家の機能についてみると、たしかに先祖祭祀は形骸化し、生活保障の意味は薄れていつてゐる。しかし、付加価値の高い品物をつくる職人稼業の場合、ある種の家の信頼というものは依然としてなくなつていかないようと思われた。こうしたことから、京都やその周辺部の農村の中には経済的条件以外の、家を支えていくようある種の価値、文化構造があるのではないかという問題関心が生まれてくる。これをどういうかたちで捉えていくのか、それは私たちの今後の課題であろう。